

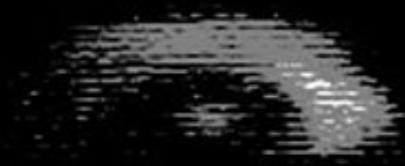
いど
こ
い
つ
も
い
つ
も

狂

っ

て

る



エンジン

第1話

亮くん観察日記

4がつ8日 月ようび

今日からしんがっき！🌸

亮くんのクラスは3-A！花壇のすぐ近くの教室！

やった！👏

これでまた、亮くんと一緒にいられる！

うれしい！😊

まゆの一年間、ハッピーになりそう！🎉🎉

4がつ10日 水ようび

亮くんったら、授業中居眠りばかり！😓

もう三年生なんだよ！

しっかりしなきゃ！😡

まゆが隣の席なら、起こしてあげられるのになあ😓👉

4がつ15日 月ようび

今日の科学の授業の時、亮くんはガスバーナーの点け方をド忘れしていて、困ってました🐱

まゆが遠くからそっと教えて上げたのに、ぜんぜん気がついてくれなかった！😞

もう、ドジ！😓💧

4がつ19日 金ようび

今日は体育。亮くんの身体、スラッとしててカッコイイ！👉👉

夏になったらプールがあって、亮くんの裸見れるんだよね👀

想像しちゃう！///

それに引き換えまゆの身体は.....😞

うう.....全然自信ないや😞😞

亮くんに笑われちゃいそう👇👇

よし、ダイエットするぞ！😞

4がつ23日 火ようび

B組の良子ちゃん、彼氏できたんだって😊

毎週日曜日、デートしてるんだって😊💕

亮くん、好きなひといるのかなあ🐱

まゆの好きな人は.....ダメ、書けない😞

恥ずかしいもん///

5がつ1日 木ようび

ゴールデンウィークで学校はお休み！👌

でも、うちはどこへも行きません😞

亮くんの家に言ってみたけど、留守でした😞😞

鍵も閉まってました、チェッ！😞😞👉

5がつ5日 月ようび

夕方、近所のスーパーで亮くんを発見！👀

にんにくにじゃがいも、たまねぎを買ってました🐱

晩ごはんはカレーかな？🍴

私もカレーが食べたくなっちゃったなあ😞

5がつ12日 月ようび

今日は雨でした☔

なのに亮くんってば、友達とグラウンドでサッカー始めたの！😡

泥まみれのびしょぬれ！💧💧

案の定、先生に怒られちゃった！👉👉

バカ！😡👎

5がつ13日 火ようび

亮くん、お休みでした🙄

風邪を引いたみたいです🙄💧

雨なのにサッカーするから.....🙄🙄🙄

5がつ14日 水ようび

今日も亮くんは休み😞

心配だなあ😞😞

お見舞いに行きたいけど、まゆがいったら絶対怒るだろうなあ👉👉

だってまゆ、亮くんとお話したことないんだもん。

「誰だお前」って言われちゃうよ.....👉👉👉

5がつ16日 金ようび

今日はすごくいやなことと、すごくうれしかったことがありました！🌸🌸

まず嫌なこと！

C組の不良たちが、花壇の花を滅茶苦茶にして、止めに入ったまゆも殴ろうとしてきたこと！😡😡

そしてうれしかったこと！

なんとなんとなんと！ 亮くんがまゆを助けにきてくれたのです！😊😊

身長も高くてがたいもいいい亮くん、不良達はたじたじになって逃げていきました！😊

まゆ、何度もお礼言っちゃいました。

初めて、亮くんとお話しました！😊👌

ここでも言っちゃいます！ ありがと！ありがと！ありがと！😊👌😊👌😊👌

5がつ19日 月ようび

問題です??

まゆは亮くんをどう思ってるんでしょうか？

1、友達

2、クラスメイト

3、（黒く塗りつぶした跡）

5がつ23日 金ようび

もうすぐ、6月11日

亮くんの誕生日です🎁

まゆもプレゼントを渡したいなあ😊🎁

でも亮くんってなにが好きなんだろう😞

好きなのはスポーツだけど、なにをあげればよろこぶんだろう？

食べ物？🍴 ゲーム？🎮

中学生の男の子って、なにが好きなんだろう？

5がつ26日 月ようび

学校が終わってから、夜遅くまで亮くんの家を見てました👁️👁️

亮くんの好きなものが知りたかったからです！👁️👁️💖

途中で亮くんが外に出てきた時はびっくりしたけど、何とか見つからずに済みました！🐱

見つかったら、絶対変な奴って思われてて、嫌われてたもん👉👉

あ、でも、思い切って亮くんに言った方がいいのかしら。

うーん、うーん😞👉

5がつ27日 火ようび

えへへ😊

夜中に眠れなくなって、

亮くんのことを考えてたらムズムズしちゃって

そしたら、勝手に手がパンツの中に入っちゃって.....。

その、しちゃった!!!

気持ちよくなって「あっ」って声まで出ちゃった!!!

まゆ、ドスケベ! 😳💕

やっぱりまゆ、亮くんのが、好き! 💕💕💕

5がつ28日 水ようび

(全文黒く塗りつぶされている)

5がつ29日 木ようび

亮くん

亮くん

亮くん、亮くん亮くん、亮くん亮くん亮くん亮くん

亮くん亮くん亮くん亮くん、亮くん亮くん、亮くん亮くん、亮くん亮

くん、亮くん亮くん、亮くん亮くん、亮くん亮くん、亮くん亮くん、

亮くん亮くん、亮くん亮くん、亮くん亮くん、亮くん亮くん、亮くん

亮くん、亮くん亮くん、亮くん亮くん、亮くん亮くん、亮くん亮く

ん、亮くん亮くん、亮くん亮くん、亮くん亮くん、亮くん亮くん、亮

くん亮くん、亮くん

6がつ3日 火ようび

亮くん、好きな人がいるんだって

B組の桜木って女。

ケバくて鬱陶しい女よ。

あり得ない

何かの間違い

6がつ4日 水ようび

今日、学校を休みました。

亮くんがあの女の話をするのをみたくないからです。

6がつ5日 木ようび

今日も休みました。

でも、亮くんの家に行きました。

亮くんがあの女と一緒に帰ってきてたらどうしようかと思ったけど、一人で帰ってきました。

よかった.....

でも、どうしたらいいんだろう

どうしたら、亮くんをあの女から引き離せるんだろう

6がつ6日 金ようび

あのクソアマ！

亮くんの告白を待ってるとか言ってやがった

おまけに、すごく下品なこと言ってた！

(黒く塗りつぶされている) だとか、

(黒く塗りつぶされている) だとか！

ふざけるな！

亮くんは、あんたなんか好きにならない！

あんたなんかと寝ない！

亮くんが好きなのは、まゆに決まってるのよ！

6がつ7日 土ようび

まゆ、がんばりました😊

つかれちゃった😞👉👉

悪者には、勇気を持って立ち向かわなきゃ

6がつ8日 日ようび

学校には行きたくないです。だっ

(それ以降、読みとれないほどの汚い文字や、無為に書かれた丸や線のみ)

6がつ9日 月ようび

(走り書き)

まゆはどうしたいの？

亮くんと、どうなりたいの？

6月 10日 火ようび

(走り書き)

もうすぐ、亮くんの誕生日だよ。

大切な日なんだよ。

早く決めないと、まゆ。

亮くんとまゆ。

まゆの気持ちはどうなの？

まゆは亮くんに、何をしたいの？

6月11日 水ようび

まゆ、やっと分かった😊

まゆは、亮くんが欲しいのです😊👏

でも、亮くんはまゆについて何にも知りません😞

まゆは亮くんにもまゆを知ってもらうことが、今まで怖かったの😞💔

亮くんには嫌われたら、生きていけないから💔🚗

でも、このままだといけない。

いずれ亮くんは卒業して、二度と会えなくなるかもしれない。

だから、まゆは勇気を出さなきゃダメなんだ！😞😞😞

だから、まゆ、プレゼントします🎁

亮くんが本当に欲しいかどうかは分からない。

でも、まゆは、まゆが伝えたいものを、あげるんだよ。

だから、まゆをあげます😊🎁💖

<2013年 6月12日 朝刊>

市立白浜中学校の生徒殺害の後暴行、用務員の男を逮捕

白浜署は11日、殺人及び暴行の現行犯で、市立白浜中学校に務める用務員、五十嵐真弓容疑者（54）を逮捕したと発表した。

同署によると、五十嵐容疑者は11日夜、下校途中であった同校の生徒、川島亮さん（15）に対し性的行為を要求したが断られ逆上、川島さんの頭をブロックのようなもので何度も殴打して殺害した。

更に川島さんの遺体から服を脱がし、性的暴行に及んでいた所、付近をパトロールしていた警官に見つかり、取り押さえられた。

容疑者は現在心神喪失状態にあり、白浜署では容疑者の回復を待った上で、精神科医との連携の上で事情聴取を行う方針。

また、五日前から行方が分からなくなっている同校の生徒、桜木由佳さん（15）にも何らかの関わりがあると思われるっており、二つの事件の関連性についても捜査を進めていくとのこと。

（第1話 完）

第2話

猫のしっぽ

先生の都合で部活が休みになり、私は良い気分で自転車を走らせていた。

途中、いつも通る道が工事で塞がっていたので、別の道を通ることにした。この道は途中で大きな公園にぶつかる。中央に大きな池があり、野良猫がたくさんいるのだ。あの公園に行くのは、何ヶ月ぶりだろうか、猫も見てみたいな。

そんなことを考え、私は自転車のまま公園の入り口へと入った。

いつも猫がたむろしていたベンチの辺りには、3、4匹ほどの猫が集まっていた。縞猫に斑猫、黒猫に白猫。

「・・・・・・・・あれ？」

だが、全ての猫にしっぽがない。尻からちょっと先の辺りで、切り落とされたような風になっていて、血が止まらず赤く腫れ上がった切断面がすごく痛々しい。

誰がこんなことを！と心中憤っていると、後ろから声を掛けられた。

振り返ると、薄茶色の服を着た丸っこいおばさんがいた。

「お嬢ちゃん、何してるの？」

「いえ、猫が好きなんで、ちょっと見てたんです」

「そうなの。私も猫が好きでねえ、いつも餌をやってるの」

片手に下げたビニール袋越しに、干したササミのようなものが見える。

おばさんがベンチに腰掛けると、草むらから尻尾を立てた大人の三毛猫が現れ、ちょこんとその膝の上に飛び乗った。

「なついてるんですね」

「そうかしら？」

「しっぽが立ってますもん、猫がしっぽを立ててる時はなついてるってことでしょ？ 確か」

「ご名答、猫ちゃん流の愛情表現ね」

おばさんは小さく拍手した後、三毛猫の頭を撫でた。

「・・・でも、猫ちゃんを苛めようとする悪い人は、こうしてなついてきた猫ちゃんのしっぽを思いっきり掴んで捕まえちゃうのよ。そうすると、猫ちゃんは逃げられなくなっちゃうの。この子も最近ここに来ただけど、悪いことされないか心配で心配で・・・」

やっぱり、猫を虐める人がいるんだ！

おばさんは悲しそうな表情になった。

「昨日もね、可愛らしいクロちゃんが口から餌を吐いて死んでたの。きっと、毒を食べさせられたのよ……」

「ひどい！」

本気で腹が立った。

何にも悪いことしてない猫に対して、最低だ。多分、罪の意識なんてこれっぽちも感じない人間なんだろう。

「おばさんも悲しいわ。猫ちゃんを虐めたって、何の得にもならないのに……」

「警察には言ったんですか？」

「ダメだったわ、全然相手にしてくれないの。所詮、動物のことだからって」

「そんな・・・」

「悲しいけど、これが現実」

おばさんは少し間を置いた後、私の方を見つめて話し始めた。

「お嬢ちゃん、お名前は？」

「奈美です」

「もしよかったら、奈美ちゃんも暇な時に猫ちゃんに会いに来て欲しいのよ。人の目が増えるだけでも、大分違ってくるからね」

「猫ちゃんのボディガードですね！」

「その通り、いいかしら？」

「はい、喜んで！」

「ありがとう、奈美ちゃん！」

おばさんの笑顔に、私も笑顔で応えた。

「さて、猫ちゃんがしっぽを掴まれないよう、ケアしなくちゃ！」

おばさんはそばにいた三毛のしっぽを素早く掴んだ。

そして、ポケットから黒い布切りバサミを取り出し、慣れた手つきで根元から斬り落とした。

(第2話 完)

第3話

外科医の趣味

私は外科医だ。消化器を専門にもう20年以上、大きくも小さくもないそれなりの病院で、それなりの権限を与えられてそれなりに働いている。

また、家族もいる、妻と娘、父と母も健在だ。

皆、私の収入で生きている。貧しかった子供の頃とは違い、生活も満ちたりており、皆、私に感謝してくれて、医師として、また家族の長としての私に全面の信頼をおいてくれている。

「少しでも体調が悪くなったら、私の病院に来てほしい」

その言いつけを忠実に守り、私が推薦したものを何の疑いもなく食べ続けてくれる。例え専門外の目的で来院しても、向こうから必ず私に顔を見せに来てくれるのだ。

そして私の趣味は、仕事である。釣りよりも根気が要り、天体観測よりも機会に恵まれていない、滅多にない機会を逃してはならないよう、綿密な準備が必要な趣味だ。

私の趣味は、家族の腹を開くことである。

家族全ての執刀を自ら引き受け、その内臓物を眺めることが、私の生き甲斐なのだ。

つうつと腹部を切開すると、そこには希有な空間が広がっている。濃いめの桃色を基調とした、血と肉と骨が織りなす有機的世界。

私は消化器専門なので、主に胃や腸などを中心に「見る」わけだが、それらにも人それぞれの個性があり、大変面白い。

だが、全然知らない人物の腹の中など面白くもなんともない。やはり、家族でなければ。

母の胃は他の人に比べるとやや小ぶりだった。少々いびつな形が、水棲動物のアメフラシを思わせる。アメフラシとは大分色が違うかもしれないが、生々しさと瑞々しさという点においてはよく似ていると私は思う。血管の色合いが薄く、あまり自己主張していないのも印象的であった。

最も美しかったのは、娘の腸だ。

ピンク色のバランス加減が極めてすぐれていて、皺の波打ち加減にダイナミックな躍動感があった。限界まで成長し続けた条虫であっても、このような生物的オブジェクトを持つことはできない。

写生を趣味とし、この年で親に逆らったことなど一度もない、お下げ髪 of 極めて地味な十五歳の生娘の中に、このような大胆かつグロテスクな未開の地帯が潜んでいようとは。

あまりにも美しかったので、手術中、他の人間の眼を盗んで鼻を近づけた。ほのかでありながらもはっきりとした刺激臭が鼻をつき、何とも心地よかった。

逆に父の腸は、もっとも醜悪だった。

彼は若い頃の赤貧と無茶な労働が祟り、慢性の胃腸炎を抱えている。荒々しく騒音を鳴らしながら非効率な運動を繰り返す壊れ掛けの作業用機械のごとく、その内臓器は疲れ果てていた。

汚水と入り交じったような鮮度の感じられない赤色。死人が今際に2、3回指を動かして出来たかのような、弱々しい表皮。醜いものであったが、彼が何十年も苦労の中で生きてきた証であり、やはり素晴らしかった。

いくら家族旅行で笑顔を浮かべて強がり、健在ぶりをアピールしてみても、内臓までは誤魔化せないのだ。これぞ、生物の根源的な何かから創造される、唯一無二の芸術作品ではあるまいか。

そして今、私は妻の腹部を切開しようとしている。

妻はもう助かる見込みがほとんどない、末期の胃癌だ。

この機会の為に、妻の食事については長年慎重に調節してきた。多少の体調不良は気にせず無理をして気丈に振る舞うという妻の性格も成功に繋がった。

結婚相手を激選した甲斐があった。

他の人間は既に追い払った。少しばかり涙を見せて「二人きりにしてくれ」と騒ぎ立てただけで自分達から出て行ってくれた。

だが、しばらくすれば様子を観に来るだろう。わずかであり、二度とない時間だ・・・。

・・・おぞましい。

娘に勝るとも劣らぬ艶やかで妖絶な肉塊が、毒々しい藍色の疣目とシダ植物の群に浸食され尽くし、死にかけようとしている。大学の構内で初めて出会った日から私のことを信じ、笑顔を見せ続けてきた女は、ここまで犯されていたのか。

私はメスを勢いよく臍物に振り下ろし、そこから更に深く、縦に切り裂いた。

断面がライトに照らされ鈍く光り、そこから流れ出す、薄紫と紅色の液体。美しいものを無残に破壊したことによる、この上ない恍惚感。

背後で執刀助手の叫び声が聞こえた。

勝手に執刀し患者を死なせたことで、おそらく私は職を追われ、裁かれるだろう。自ら妻を殺した悪魔の医師として、マスコミの飯の種にもなるだろう。

だが、後のことはどうでもいい。今日の前に広がる、この空間だけが世界なのだ。

私は亡き妻の腹中にゆっくりと顔をうずめ、愛でた。

(第3話 完)

第4話

暑い

信号が変わる直前、前にいたタンクローリーの進路に割り込む形で、軽自動車は右折した。

「今の危なくない？」

助手席の女がリップクリームの蓋を閉じながら、運転席の男に言った。

「いいんだよ、向こうがさっさと行かなかったから悪いんだ」

男は額から目に落ちようとする汗を拭った。

フル稼働のくせに今一つ効かないクーラーの雑音に混じり、ラジオからニュースが聞こえる。

——本日午前、東京都葛飾区美容室に中年の男が進入し、「俺の頭を奪った」などと意味不明な言葉を叫びながら、持っていた草刈り鎌で店内にいた店員や客に襲いかかりました。

この事件で、店長である三輪咲子さんが喉を斬られ、病院に搬送されましたが、まもなく死亡が確認されました。

男は駆けつけた警察官に取り押さえられ、現在警察の取り調べを受けているとのこと——

「鎌だって！ 怖いね」

そう言った後、女は空になったペットボトルを後部座席に放り投げた。

「犯人、何でおかしくなっちゃったのかなあ」

「そりゃ毎日この調子だもん」

男はラジオの上に表示された「38℃」という文字を指差す。

「これと人殺しと何の関係があるのよ」

「頭がやられるんだよ」

「あり得ないわ、機械じゃあるまいし」

「機械の方がまだ丈夫だよ」

車は何度か赤信号に止められながら道なりに走り、前方にあるガソリンスタンドへと向かっていく。

「ちょっとガソリン入れるわ」

「その後どうするの？ 私どこでもいいけど……」

女が何か言う前に、男は女の腿を触って答えの代わりにした。

女はまんざらでもなさそうに笑って、頷いた。

そして車はガソリンスタンドへと入っていく。

若い店員が近づいてきたので男は窓を開け、ガソリンを入れてくれるよう頼んだ。特に気にしてもいないタバコの吸い殻や、無駄に時間のかかる車体の掃除をいかにもマニュアル通りにオススメされたが、男は「いい、いいから」とぶっきらぼうに断った。

「さっきの話だけどお」

女が男の肩をつついて話しかけてくる。

「鎌の犯人って、動機は何だと思う？ ねえ？」

「頭がおかしかったんだよ」

「納得いかないわ、まともな理由があると思うのよ」

「だからどうでもいいよ」

顔つきと身体以外、この女を連れ回す理由はない。

「鎌で喉を切り裂いたのよ、きっとすごい恨みがあるんだわ」

とは言え逃げられるのも癪なので、男は適当に相手することにした。

「別に大したことないって。イライラしておかしくなったんだよ」

銀色の給油ノズル片手に車の給油口を開く店員を横目で見ながら、男は言った。

「たとえばさ、あの店員が昨日彼女にこっぴどくフラれてイラついててさ」

「ふんふん？」

「それで俺ら二人を見てカアッとなって、給油ついでにこの車の中にマッチかライターでも投げ込んで爆発させてやろうか、なんて考えてるかもしれないぜ」

店員が男を睨む。

「えーありえないわ、漫画じゃないんだし」

「そう思うんならいいよ、別に」

（やっぱりこの女はバカだ）と呆れてため息をついた後、男は車から顔を出し、まだ終わらないのかと店員をせかす。

店員はノズルを給油口から引き抜き、男に金額を伝えた。その金額は男が予想していたよりも高かった。

更にしぶしぶそれを払おうとした時、持っていた紙幣が自分の想像よりも少なかったことに気が付いた。

「いちいちコンビニに寄らなきゃいけなくなった」

財布に入っていた紙幣を全て出した後、誰にでもなく男は呟き、店員が差し出したレシートをひったくって乱暴に車を発進させた。

店員は舌打ちをしつつ俯き、ポケットの中のライターを残念そうに見つめた。

だがその為に、急に後退した車に全く対応することができなかった。

店員の身体はトランクの上に倒され、更にそのまま後退し続けた車と柱に挟みつぶされた。

車は一旦前進し、血の泡を吹き出している店員の頭めがけて再びバックした。車中に鈍い衝撃が走る。

女は泣き叫び扉を開けようとするが、手元が震えて上手くいかない。

「仕方ねえだろ、イラついてたんだよ」

その端で男はどうしてもよさそうに、前を見ながら呟いた。

女が泣き止む気配を見せないなので、一発殴ってやろうかと右を向く。

すると、すぐ近くに大型のタンクローリーが迫っていた。

タンクローリーはそのまま衝突して女ごと車の右半分を押し潰した。

そして男が扉を開ける間もなく、給油機やスタンドの事務所ごと車体を拉ぎ、そして自らもその勢いで横倒しになった。

それから間もなく、凄まじい爆発とともに、生ぬるい熱気が辺りを覆った。

(第4話 完)

第5話

彼女は苔を醤油で食べる

久々に彼女の住まいへ行くと、彼女が苔を食べていた。醤油の入った小皿に、土のついた抹茶色の塊を浸してそれを口の中でじゃりじゃりと鳴らしていた。

勢いに任せて、彼女を殴りつけた。

「どうして!?!」 「なんで!?!」

と、彼女はやかましく泣きわめき、俺を罵る。

なんと言うことだ、自分がやったことの異常性が認識できていないらしい。

俺は彼女を正常に戻す為、鬼となってその行いを問い質した。

彼女が語るところによれば、苔を醤油で食べるようになったのは、かれこれ二週間ほど前。テレビ番組の中で、取れたての海藻を溜まり醤油で食べているのを見て思いついたらしい。

番組が終わると、すぐさまスコップ片手に公園へ行き、公衆便所の隅などを削って新鮮な苔を調達、それを家にあった薄口の醤油に浸して食べてみたところ、虜になってしまったという。

乞食ですら真似しないような食事だ。

いや、食事とは到底言えない。

だが、彼女に言わせてみれば、苔本来の酸味と醤油の酸味が見事に合わさり、更に苔のプチプチした触感が重なって、やめられなくなってしまったのだと言う。

更にそこに湿気た泥のジャリジャリしたのが加われれば最強で、犬の小便だのドカタのおやじの腐った靴の匂いや酸っぱさまで加われれば、絶対無敵なのだとのたまう。

病気だ、彼女は病気になってしまったのだ。

僕は彼女をもう一度、思いっきりひっぱたいた。

そして、己の行為がどれだけ狂気の沙汰であるかを、何時間もかけ説明した。

彼女は涙を流しながら憎しみの眼を向けていたが、僕の熱意にほだされ次第に目元が緩んでいき、とうとう大泣きして僕に抱きつき、もうしない、二度としないと誓ってくれた。

そう、これでいいのだ。

僕の愛が、彼女を悪魔的な愚行から救ったのだ。

それ以来、彼女は僕の家同居するようになった。

「いつまでも、私を守ってほしい」だってさ。

これからは、一緒にご飯を食べるんだ。

ちゃぶ台の向こうで微笑んでいる彼女に微笑みを返し、僕自身が選んだ食材を使った自慢の料理を見渡す。

うわあ、何とも美味しそうなこと！

いただきます！

僕は、小皿に盛った採れたての白カビに、マヨネーズをふんだんにかけた。

(第5話 完)

第6話

のろけ話

僕は毎年お盆に、東京から帰省してきた友人と会う。

その時決まって彼が話すのは、今付き合っているという彼女の話。

「昔の菅野美穂に似てる、すごくいい娘なんだ」

「毎日メールしてる。話題が尽きないんだよ」

「この間水族館に行ったら、彼女ペンギンの水槽の前から離れなくて」

「プレゼントをすると、すごく喜んでくれるんだ」

「手を繋いで街を歩くと、皆俺達を見るんだよね」

「夜なんか、本当に可愛いんだぜ」

この話を聞かされる度、僕はうんざりするというよりも、寒気がする。

なぜならその彼女というのは、彼が大学生の頃に自殺した筈だからだ。

(第6話 完)

第七話

財布の中の紙切れ

その日の朝、会社から突然の解雇通知を受け、どうしようもない気分で駅前を徘徊していた。

誰もいない公園のベンチで塞いでいると、向こうから知恵遅れらしき男がやってきた。40代にしか見えない癖に、所々が茶色く汚れた子供向けの帽子や服を着て、訳の分からない言葉を呟きながらヘラヘラ笑っている。

それを見て無性に腹が立った俺は、そいつの小汚いケツを思いっきり蹴り上げてやった。

笑い声とも泣き声とも付かぬ素っ頓狂な叫び声を上げ、そいつは一目散に逃げていった。

ふと地面を見ると、財布が落ちていた。あの男が落としていったもののような。いかにも安物の長財布だが、手にとってみると結構な厚みがある。

これは儲けたと内心嬉しくなり、チャックを開けて中を見た。

ところが、入っていたのは石ころやどんぐりばかり、札どころか小銭すらない。

「なんだよ」とがっかりしつつ呟いたたその時、しっかりと二つ折りにされたノート用紙を見つけた。

結構古いものなのか、全体的に黄ばんではいたものの、破れや酷い汚れもなく、ゴミだらけの財布の中でそれだけが妙に綺麗に感じられた。

好奇心とともに、中身を開いてみた。

そこにはただ一文、非常に丁寧な字でこう書かれていた。

「この子が死んだら、無縁仏として適当な場所に埋めてください」

俺は財布とその紙をゴミ箱に捨て、取り除きようのない重みとともに帰路についた。

(第7話 完)